第五十四回中央教化研究会議　基調報告

# 私たちに必要なことは新しい体験

三原正資

こんにちは、まず、本日の講師、枝木美香先生と西永亜紀子先生に御礼申し上げます。両先生の基調講演にさきだち、テーマ、「仏教とジェンダー平等の実現」について私の体験したこと、考えていることを述べさせていただきます。

二〇年ほど前のことです。建設されたばかりの千葉県清澄寺研修会館で中央教化研究会議が開催されたときに、私は忘れられない体験をしました。

第一日目の夕食のとき、ひとりのやや年配の女性教師が若い男性教師が多いテーブルの湯呑にお茶を注(つ)いで回っていたのです。ところが、その様子をみていた台湾の尼僧さんが、（この会議に来ていた事情は失念しましたが）近くにいた私たちに、「台湾仏教では考えられないことです」と強く批判したのでした。現在でも、私たちの行事の折に組織の中では男性は女性より優位というこのような光景は見られるのでしょうか。

さて、『芸術新潮』（二〇二一年六月号）は「新・永遠の美少年」を特集し、その中で池上英洋(ひでひろ)氏（美術史家　東京造形大学教授）は、古来、美少年がもてはやされた理由と、人類のジェンダー・ギャップ（性格差）の歴史について次のように述べています。

人類の歴史に無数の美女が登場するのと同様に、多くの美少年たちが世界史を彩っている。（略）これまで歴史のほとんどの部分を男性が作ってきた（＝書き記してきた）事実があるため、美女の基準は、基本的には男性たちが望むイメージを直接的に反映している。（略）

一方、美少年が美しいものとされてきた経緯は、はるかに複雑である。歴史を作ってきた男たちは、自分たちを上位に置くためにも、男性をこそ完全体に近いものと定義した。多くの神話で神が「自らに似せて」男性を創ったのもそのせいである。その方が彼らにとっての社会秩序を維持しやすいとも考えたのだろう。こうした男尊女卑的な意識は、ギリシャをはじめとした多くの古代世界に見られる。女性と性行為をおこなうと一種のけがれをまとうという、（現代では叩かれること必至の）極端な考えへとつながっていた。おわかりだろうか。なぜ無垢な少年が無上の美とされたのかを―。

では、キリスト教ではどうなのでしょう。池上氏は次のように述べます。

「天の国のために結婚しない者もいる」（『マタイによる福音書』19：12、新共同訳）。これは新約聖書に書かれた言葉である。聖書の想定読者は基本的に男性なので、天国に入るために結婚しない男性がいる、との内容である。言い換えれば、結婚すると天国に行けるチャンスが減るという意味になる。

ここには、「男性は女性と性行為をおこなうまでが完全体」という序論にて述べたような男尊女卑的な考えを見てとることができる。

仏教について、池上氏は言及していません。

私は五〇年余り前、当時五〇代の寺庭婦人から、「昔、先代の住職の袈裟・衣をたたもうとしたところ、先代から『さわるな、けがれる』と叱責され、驚いた」という思い出話をうかがったことがあります。二〇二一年に『世界男女格差レポート』（世界経済フォーラム）で公表されたジェンダー・ギャップ指数（世界各国の男女間の不均衡を示す指標）で、一五六カ国中一二〇位という日本の、わが教団内の実状はどうなのでしょうか。

ところで、二〇二一年春のコロナ禍、緊急事態宣言中に面白いミステリーを読みました。『わたしは贋作』（バーバラ・ボーランド　ハヤカワ文庫　二〇一九）というアメリカの女性アーティストの物語です。

女性アーティストはフロリダの母子家庭の出身。ニューヨークに出てきた若い女性アーティストのテーマは、キリスト教、ジェンダー、貧困など、女性を抑圧するものです。彼女は仲間の異性アーティストと次のような会話を交わします。

「作品のタイトルは？」

「《慎重》――はもう見たわよね。それと、《貞節》、《謙虚》、《従順》、《慎み》、《節制》、《純真》」

「〝慎重は無能に求愛される金持ちの醜い老嬢である〟」（『ブレイク全著作』（梅津済美訳、名古屋大学出版会）「天国と地獄の結婚」より）タイラーが言った。

「どうしてわかったの？　ブレイクを知ってるの？」（略）

「きみだってブレイクを知っているじゃないか」

「ええ。大好きなの。教会を解体して人間を再生させようとするひとはみんな好き」

「きみの家族は信心深いの？」

「母はね。母は罪を犯して、祈って、赦しを請うの。その繰りかえし」声が小さくなっていく。（略）

「どうしてそういうタイトルをつけたんだ？」
「女の言葉だからよ。わかる？　男の行動を取り締まるための言葉じゃない。女を――女だけを縛る言葉なの。わたしは、女はそうあるべきだと聞かされて育った。それが何よりも大事なことだって。でも、もう……うんざり。大人になるときが来たってわけ。わたしにとってはね」
「よくわからないな」

このように女性アーティストは、アートによってキリスト教、そして社会を批判しています。
橋爪大三郎氏は『世界がわかる宗教社会学入門』（ちくま文庫　二〇〇六）の中で、「社会学は、社会現象を科学的に解明する学問」として、社会現象を解明するために制度、文化、組織などの社会構造に注目するとして次のように述べています。

そうして宗教も、社会構造である！　社会構造の中でも、もっとも重要な社会構造であると言えるのです。

すなわち『わたしは贋作』の主人公の女性アーティストは、「女だけを縛る言葉」である、《慎重》、《貞節》、《謙虚》、《従順》ということばの背景に、社会構造としてのキリスト教の存在を見ているのです。
近年、アメリカで「#Me Too」運動が起こりました。アメリカ社会における女性抑圧、性差別がいかに根深いものか、そしてそれがキリスト教に由来することをこの小説は激しく批判しているようです。ちなみに、二〇二一年のアメリカのジェンダー・ギャップ指数は三〇位です。
では日本仏教―日蓮宗―はどうなのでしょうか。

この小説の中で言及された「女だけを縛る言葉」といわれた、《慎重》、《貞節》、《謙虚》、《従順》……は、しばしば女性に与えられる法号に使用されていることに私は気付きました。仏教は日本の社会構造そのものとして、女性を抑圧してきたのでしょうか。そして、この法号を与える僧侶はこの構造を意識することはあったのでしょうか。なお、私の知る限り近年の女性檀信徒は「女だけを縛る言葉」を使った法号より、生涯の証として、「美」「月」「優」「麗」「光」「雅」等のいわゆる「キラキラネーム」にも似た文字を好むようです。東京五輪メダリストの「キラキラネーム」も注目されました（『毎日新聞』〈余録〉二〇二一年八月一〇日）。

さて、批判と反省だけではつまらないことです。最近の宗門の動向には希望の兆しを見ることも出来るようです。

コロナ禍に揺れる五月、宗務院伝道部から各寺院へ天野喜孝先生の描かれた「法華経画」（油彩　縦一八九㎝横一五一㎝）ミニサイズ版が送られました。降誕八〇〇年を迎えた二月一六日、小湊誕生寺本堂で公開されたこの天野氏の油彩画を見て、私はヨーロッパの祭壇画や油彩画を連想しました。かつて、横浜美術館でルーベンスの傑作「十字架降下」（油彩　縦四二五㎝横二九五㎝）に接したときは感動したものです（『現代宗教研究』第二八号所収　拙稿「妙宗本尊辨考―大曼荼羅御本尊をめぐる諸問題―」一九九四　現代宗教研究所）。手元の中野京子氏の『異形のものたち』（ＮＨＫ出版新書　二〇二一）を開くと、「法華経画」と同様に群像で構成された絵画があります。

「反逆天使の墜落」（フランス・フロリス　一五五四頃）、「快楽の園　地獄」（ヒエロニムス・ボス　一四八〇～一五一六）、「反逆天使の堕落」（ピーテル・ブリューゲル　一五六二）等です。これらの絵のように「法華経画」はエロチックであり、グロテスクであり、シュールです。

「法華経画」の中央に向かって右脇の左手を挙げている少年のようなあるいは少女のようなブッダの姿に、私は南

方無垢世界でブッダとなった娑竭羅龍王の娘、八歳の龍女を見るようです。左下で仰ぎ見ているのは父の娑竭羅龍王でしょうか。右下の白衣の修行者は舎利弗で「あ、あの少女がブッダになっちゃった」と黙念信受、合掌しているのかもしれません。異形の群像は、宇宙の辺境から来集した異形の星人を描いた映画「スターウォーズ」のようです。女性や異形のものを描き、私たちの差別や偏見を打破しようとする意図がうかがえるようです。

すべてのものにブッダの内在をみて、「いのちに合掌」を訴え、「法華経を心みよ」（『撰時抄』定遺一〇五九頁）と示された宗祖に答えようとした私たちの応答として描かれたもの、それが天野氏による「法華経画」であると私は思います。

宗祖は『大田殿女房御返事』に

龍樹菩薩の大論と申す論に、譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し、と申す釈こそ、此の（妙の）一字を心へさせ給ひたりける歟と見へて候へ。毒と申すは苦集の二諦、生死の因果は毒の中の毒にて候ぞかし。此毒を生死即涅槃、煩悩即菩提となし候を、妙の極とは申しけるなり。（定遺一七五五頁）

と示されています。人生の真実はエロチック、グロテスクな私たちの生を離れてはありえないということでしょう。

中野氏は次のように述べています。

生ぬるい日常を揺さぶり、鈍麻（どんま）した意識を覚醒させ、それまで気づかなかった新たな美、新たな視点を知らしめることも芸術表現の一つだ。そのため創り手は固有の鋭い感覚で、奇異、異様、異類、異体、そして怪の中に人間の本質を見出し、且（か）つ、それを巧みに描写して受け手に突きつけようとする。（『異形のものたち』）

ただ、「法華経画」で留意しておきたいことがあります。それは、私たちの肌の色は黄色ですが、なぜ、優美な像の肌の色は白色で、奇異な像の肌の色は黒色等なのでしょう。多様性が尊重される現代では、必ずしも過去の価値観にとらわれる必要はないのではないでしょうか（『現代宗教研究』第五五号所収　拙稿「私たちはアーティスト」二〇二一　現代宗教研究所）。宗務院玄関ホールに飾られているこのアートの前で自由に語り合ってください。

四月一七日、身延山久遠寺本堂前の現代アーティスト小松美羽（みわ）氏によるライブペインティングも忘れられません。

金と銀の箔が貼られた直径1・8メートルの円形キャンバス3枚に、時には絵具を投げつけ、また手の平を使い色を着けていく。筆を用いることもあれば、チューブから直接絵具を塗りたくり、キャンバスを彩る。（略）

完成した作品について小松氏は、「今、世界は大きな課題に直面しています。（略）中央の龍の頭からは蓮の花が咲き、瞑想している姿。下には蓮の池から多くの僧侶による世界平和への祈りの手を合わせた姿。祈りがこもった絵です」（『日蓮宗新聞』二〇二一年五月一〇日）

と語っています。

小松氏が絵の前で端座合掌する姿は無垢世界のブッダのようです。あるいは小説『わたしは贋作』の主人公、女性アーティストのようです。『わたしは贋作』で女性アーティストが「女を縛る言葉」として批判した「慎重」、「貞節」、「謙虚」、「従順」…等のことばに潜む卑屈さは、その姿にはありません。

そして、この夏、伝道部が配布した「オンライン唱題行」のポスター（部分）も印象的でした。瞑目し合掌する女性、星野雅美氏（現代宗教研究所所員）の姿は深い信仰が結晶したかのように力強いものです。

私は、「法華経画」と合掌する二人の女性の姿に「ジェンダー平等」を観る思いがしました。逆に男性がつまらないものに見えかねません。

〈人権を考える〉（『日蓮宗新聞』二〇二一年五月二〇日）の中で、中谷本耀師（人権推進委員会委員）は次のように述べています。

今後、日本が無意識のバイアスによって女性を不当に評価してしまうことのないよう、まず「自分たちの認識がずれているかもしれない」という前提に男性が立つべきだろう。我が宗門にあっても、（略）「性差別」という分断を起こさず、世の中を変えてゆきたい。

『毎日新聞』（二〇二一年六月二三日）に「ジェンダー分野遅れ報告」という記事があります。

政府は二二日、国連が定める「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」実現を目指す推進本部（本部長・菅義偉首相）会合を官邸で開き、二〇三〇年達成に向けた進捗状況の報告書をまとめた。世界の男女格差を測る「ジェンダー・ギャップ指数」で一五六カ国中一二〇位と著しく低い現状を「大変残念な状況にある」と遅れを認めた。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール（一九〇八～一九八六）は「性差は社会によってつくられる」と述べています。天野喜孝氏の「法華経画」、小松美羽氏のライブペインティング、星野雅美氏の「オンライン唱題行」のポスターは、これからの日蓮宗のジェンダー平等への決意を象徴するものと思います。

ところで、この「平等」ということについて、梯久美子氏は詩人石垣りん（一九二〇～二〇〇四）について〈この父ありて〉（『日本経済新聞』二〇二一年五月二二日）の中で、次のように述べています。

> 敗戦のとき、りんは二五歳だった。日本中の職場で民主化の機運が高まり、りんの銀行でも労働組合が結成される。（略）当時の彼女はこんなことを考えていた。
>
> 〈……今迄の不当な差別は是非撤回してもらわなければならないけれど、男たちの既に得られたものは、ほんとうに、すべてうらやむに足りるものなのか。女のして来たことは、そんなにつまらないことだったのか〉（『詩を書くことと、生きること』）
>
> 男のようになるのではなく、女のままで、ひとりの人間としてちゃんと扱われる。りんが望んだのは、そういう職場であり、世の中だった。

さて、私たちの考え方や行動が、選択的夫婦別姓やＬＧＢＴＱ問題に関わる法制整備さえ出来ない日本の社会構造を支えているのではないでしょうか。私たちは天野喜孝氏の「法華経画」、小松美羽氏のライブペインティング、星野雅美氏の「オンライン唱題行」のポスターによってその社会構造を一新していく、新しい体験をしていることに気付きたいものです。私たちの歴史には、鎌倉武士を叱咤して承久の乱（一二二一）に勝利し、三人の上皇を流罪に処して尼将軍といわれた北条政子の時代も存在したのです。

仏法やうやく顛倒しければ世間も又濁乱せり。仏法は体のごとし、世間はかげのごとし。体曲れば影ななめあり。

（『諸経与法華経難易事』定遺一七五二頁）

と宗祖は示されています。まず改めるべきは私たち仏教者の姿勢です。ジェンダー平等への歩みを進め、ＳＤＧｓを達成し、安穏なブッダの世界を実現しましょう。